

なかの ごもんおもてもん

中ノ御門表門（大手門）の歴史と特長

なかの ごもんおもてもん

鳥取城の大手門にあたる中ノ御門表門は、元和7年（1621）に藩主池田光政によって創建されました。享保5年（1720）の大火で焼失するも同年中に再建され、長きにわたり藩の威厳を示します。鳥取城は、廃城令においても軍事的利用価値が認められ存城となり、明治12年（1879）にはその役を終え、城内主要建物がすべて解体されます。このうち大手門は、明治8年（1875）に解体されました。

鳥取城大手門は、虎口を広くひらいた枳形石垣の幅いっぱい門を構え、左右の土塀を門の屋根と同じ高さまで立ち上げるのが特長です。これにより、鳥取城の正面玄関に「個性」を持たせています。

大手門創建400周年を迎える令和3年（2021）、10年に及ぶ発掘調査の成果とともに、工匠たちによる伝統技術を駆使することで、鳥取城全体の特長を最も良く示す江戸時代末期の姿で現代によみがえります。全幅は10.2m、全高5.0m。屋根には出土瓦に基づき精巧に復元された「葵紋瓦」が軒を連ね、全国12番目の石高を誇った鳥取藩の栄華を未来に伝えます。



慶應2年～明治4年撮影：鳥取城大手登城路（鳥取市教育委員会）

なぜ？

葵紋瓦の理由

なかの ごもんおもてもん

鳥取藩の家紋といえば「揚羽蝶紋」が有名ですが、中ノ御門表門周辺からは「葵紋」の瓦が複数出土しています。「葵紋」といえば江戸幕府を開いた徳川家康の家紋であり、その使用は厳しく制限されていました。しかしながら、大手門を創建した池田光政の後に長く鳥取藩を治めた鳥取池田家の初代・池田光仲が徳川家康のひ孫にあたることから、鳥取藩は後に將軍家から養子を賜るなど江戸幕府とのつながりが深く、外様大名では唯一「葵紋瓦」の使用が許されていました。